

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2023.12



創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い發生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なもの同化してきた大きな力、——それをオメロス以米ビカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

一〇一三年十二月号 (通巻七八七号)

◇今月の二十首詠……花と峰

永塚節子 2

■作品[A]

吉永惟昭・横田敏子他
矢口さた他 4

送風塔

山本 孟 49

■作品[B]

山口美恵子他
山野はるか他 52 62

■歌壇月旦

柴田登志惠 50

■作品[C]

小林さゆみ他
山元富貴・安部 律他 76 40

ひとりひとりの物語を

68

■オリーブ集

諸留能興・山口桃子
藤澤元子 16 19

■十月号作品批評

A……牧 雄彦・西堤啓子
安部 律・松本多摩子 68

◇今月の二人

私と短歌との出会い (256)
浜本茉美歌集『夢の川』

■歌壇月旦

B……神戸良三・富岡明子
C……高橋啓子 68

■第一歌集を読む) 9

光広祥子
久我田鶴子 20 18

■十月号作品批評

オリーブ集……もとむらしげと
〔編集部〕 68

●追悼・朝井恭子

朝井恭子作品三十首
追悼文

■遊覧寄港

〈宮終〉一と江夏の21球〉
八巻信隆 48

一短歌を生きる力に—

磯田ひさ子・選
中島央子・中原 陽・酒井治子

■シルクロード・カフェ

〔責任編集〕 木村文子 46

クリップ……90
神田通信……表3

(表紙デザイン) Tatsuo Nagai

◇冬のアンソロジー 〈冬を拡げる〉

上林節江 38

朝井恭子作品三十首

中島央子・中原 陽・酒井治子

■鑑賞・三好直太の歌 5

〈船出〉 久我田鶴子 15

吉永惟昭

吉永惟昭・横田敏子他

矢口さた他 4

吉永惟昭 34

花と峠

永塚 節子

一九四二年生まれ。
銀座グループ所属。

歌集に「かえるっぱ」がある。

ひと本の花なかりせば來し方もこの先先も侘しかるらん
 うつしえの花の名出でず貞織る山草野草茶花の本まで
 ようようたどり着きたる花の名はキンボウゲ科れんげじょうま
 この道を左に行けば清兵衛峠いかなる花の待ちているらん
 大方はほんのり紅さすれんげじょうま蕊まで白きに息を呑みぬ
 深深と静もる森の麗人かれんげじょうまは俯きて立つ
 梅雨明けを待ちに待ちいし山行は年中行事の三ツ峠行き
 通い慣れし峠への道この角を曲がればしもつけいつもの所に

數うれば四十種ほど植物の名を書き記し三ツ峠まで

あの花にいまひとたびと来たれども峠への道は通行止めに
この花は螢の眠るという話思わず知らず互みに笑う

こまくさの群落前に腕組みするうつしえの父満面の笑み

父は逝き友も逝きたりことごとく記憶の底の花と峠

行き損ねたる峠はもはや夢の中そこのみの花知る手だてなし

うつしえのれんげしぇうまは色あせず瞬時に誘うあの夏の森

目の前の乙女峠を越えゆけばやまゆりの香の傾りにつづく

神奈川の県花はやまゆり小田原の市の花は梅われは梅派

障害を持つ人集う家の前小さなひまわり空を見ている

別名を早乙女花と知りし今安堵しおりへくそかずらに

これからは雑草手帳たずさえて路傍の花を探し歩かん

作品 A

吉永惟昭

神無月

・熊

神主に招じ入れられ飲み呆け一夜の神泊 忘れ得ざるも
先日はお世話かけました七・五・三貧乏神のせめて留守居を
神無月まだ大丈夫と思つたに破れ拌殿風の冷たさ
たまらずに便所を探す神殿に大座布団の温かきかな
神主に神の寝床を聞いたらば鎮守の杜と真顔で応う
紅白の幕をかしげば倒れきしご幣の紙の温かきかな
神無月せめて貸家でゆっくりと明日大掃除して帰りますから

横田敏子

二月の林

・福

ひと冬を耐えし裸木瑞々と芽吹く日を待つ二月の林
モノトーンの林の中に蝦夷のおぼろ月夜のような明るさ
仰ぎ見る桜の苔まだ固し 3・11の記憶薄れゆく
五十年、百年先のことは知らず爆ぜし原発の魔炉は進まず
疲れ果てて軋むこれらの戸を開き春を探しに一步踏み出す
震災後初めてと思う郭公のさわやかな声胸に染みに入る
萌黄色の宝石のようなマスカット一粒この夢を食みゆく

山下雅子

母の日

・習

透き通る嘲りひびく雨上がり空のいすこによるこびおらん
江戸切子のグラスに香る白ワイン心づくしに母の日ほろ酔う
達者なりし母に赤き花束を昭和のバスにゆられゆられき
人影の見えずマスクを外したり若葉の匂う春のま盛り
いつの間に三元号生くコロナを知りWBCの快挙に足らう
ウクライナの惨状映りよみがえるわれの戦時は昭和に消えず
願わくばウクライナの地に向日葵をゴッホもひたすら祈りいるべし

山野幸司

初

・沖

収穫の初に混じりし草の実もいとおし山の棚田の命
氣合入れ斧振りおろす一瞬に丸太すつきり二つとなれる
夏草を刈り廻る畦音高くエンジンかなし孤独を深む
暮るるまで稻刈り進む田に残り我とカエルと飛び跳ねている
玄関に帰り来たれる母の声子らは駆け行く玩具を残し
竹の根を土もろともに引きはがすユンボは山に山作り行く
草刈り機共に走れる田の中を隠れ隠れのカヤネズミ行く

山本孟

人想ふ

・大

つれ合ひのつひに逝きし日独り身にあふれ出づるを短歌に託す
誕生日祝ひの晩餐してくれし子らを生みたる妻は空席

メタセコイア苦生すまでに古びたる庭地二人の子供の故郷

銀杏落ち葉行く先に嵩をなし船鳴けばまた歩き出す

街路樹のいまだ芽吹かぬ三月をオープン戦の喊声あがる

どの枝も花花花の桜樹に人想ふなりきのふもけふも

牛乳を最期の日まで飲むと決めその乳白色に口をつけたり

養学登志子

夢

・凌

駅階段昇りきるまで見ていたと電話のありぬ案じられしか

手の平にのせて般若の置物の年月を経し白磁の変貌

筆立に混じる細身の竹の差し飴色をして御守り然とす

雑然と並ぶ本棚雜念と生き来し頃のそのままなる容

猫といたい犬といたいと思いつつ琉金倒えり十四年いて死ぬ

娘暮出でて二尺は跳んだ猫の貌尾は太ぶとくらみしまま

電話鳴りて二度と見られぬ夢の消ゆも一度眠りて見よとやむなし

磯田ひさ子

おひとりさま

・森

モンブランの新色インクミッドナイトブルーわがあさゆふの心にぞ触る
桺の立ちしばかりのすすき生きものの気配なき家を潤しくくる
草ぐさの末搖れやすす初秋の風の訪れ紛れもあらず
煮崩れしたる魚にものいふと詠みまし加藤さんを折りふし偲ぶ
竹林に夕陽耀ひ増子さんが確かに頸ちと友告げくれし
いたばりて「おひとりさま」といふなれど「ひとりぼっち」がわれの身に添ふ
死にし人をこの世にもどす術はなしかかる思ひに諦めていく

梅本武義

里に感じる

・羊

農地荒れ跡の増えて人の減る里に感じる日本衰退

山鳴の鳴く平穏な里をとぶ電波は不穏地震に強盗

首都圈の強盗のニュース見るに付け猪歩く里の安心

荒れ畑を刈れば猪掘り返し柿の老木数多実が生る

畑土にエアガンの弾「じいちゃんが居るぞ撃つな」と言いし日遠退く
一人住む孫が気になる間バイト老いのテレビの見過ぎと言うが
スポーツに活躍するも間バイトして騒がすも孫の年齢

大浪美雪

待機

・森

発熱にヨガは休むと電話せり「えつ」と身を引く気配を感ず

発熱と医院に電話 指示待てと家にて待機外出禁止

五時間後医院の特設小屋へ行くそにて更に指示待ち待機

小屋に入りわたしは丸ごとウイルスと扱はれるを意識せらる
待ちにまち見えたる医師はビニールの防護服つけバサバサ動きぬ
半時後抗原検査は陰性と判りても尚不可触民われ

日暮れ前の知りたる医院の小屋でさへ不安兆すに真夜はいかにか

奥田陽子

傷痕

・羊

ひとと来て気配かそかに去らんとす秋蝶のはね見送りており
わが子らに未来は無いかも 戰争のゆき着く果てをしきり娘の言う
靴下をぬき捨て浜辺飘けてゆく母と子われより遠くなりつ
前庭のみどりに人ら憩えるにただ眩しくて離りきたりぬ
P.E.T./C.T.検査受け来し明くる日の夫ひたすらに枕を眠れる
大きさに驚きて見る背の傷しばらくは指になぞりていたり
花丁えしさつきの枝に触れてあり傷ある背と窓の辺に見る

小野雅子

・ソフトネット

・羊

菊地栄子

・薬菜山

・海

カシミヤの布一枚のあたたかさウクライナ人の日頃とおもふ
果物はソフトネットで人間はセーフティーネットで守らるる苦
カレンダーの写真にて見るアンダルシア道のみどりは草地が畠か
調教師がるて騎手がるて自分では走りたくない馬かもしれず
中学の通学バッグを見せに来て何回目かの「おかはり」をする
エルメスでなくては出ない布の美ときけば高価もうなづくばかり
豪徳寺の小径に生ひし半夏生 共に愛でたる人なつかしき

上林節江 優勝旗

・湾

白河を越えて来た、來た赤き旗みのくはやつとひと山千両に
三時間ならびて『四分』それでもと見つめ自撮りし旗に涙ぐむ
森奥へわれの心をわしづかみ歡喜ひろがる水芭蕉の白
国民に一つ良きこと元総理カルトの間が腑分けされくる
水雨の街追われて入るコンビニにほかほか肉まん明るく並ぶ
きさらぎの山荘の窓地吹雪の腕に氷柱はくの字に曲がる
平和だといつまで笑つておれようかズン、ズズンと値上げの砲火

神田鈴子

・自選

・大

歌会に母の死告げむと来し人のしづかなる声 時を止めたり

年賀状の途絶えし人を思ひるる松の内過ぎ凍る冬空

五万の命奪ひし地震あり避けらるる苦の戦に命消えゆく

明日の日を生くる二人に戦なき世を折るのみ 婉の席に

花を待ち花を恋ひつ逝きし母回忌の空にさくら咲き満つ
共に行くいつもの道をひとり行く耳底のこゑ温めながら

「父の日」のなき世に若き父逝きぬせめて供へむ熱きコーヒー

海原へ乗り出すことく胸はずむ春の光の石登道
蒸しタオル顔に当てつつ教える想いはかなくうつろう時を
散る桜底にため汚したる撮影会の車の座席
しるじると南天の花散りつづき移動図書館車巡回に来る
ひとり暮らしにも福分け来たる妹の孫大学に合格すると
遠目にも形勝れる薬菜山祭め行けどもなお遠き山
まだ若きりんご畑の白き花長き未来が待ち受けている

北山雪男

認知の森にて

・伊

老い桜仰ぐ黄昏 父といふ語るに余る〈敵〉傀びつ
帰省なる語彙に縁なく盆暮のスープ冷め切る距離に父母ゐき
メールにておよそ片付くこれの世にわたし厄介者の手紙派
〈マイナンバー便へ、名前ハゴミ箱へノ短歌俳句ハAーガ詠ム〉
アナログの時計憶きてかへりみる半ば崩れし虹の片脚
彼の名と認知の森にてはぐれしが二日後ふらり顔を見せたり
わが目には視えぬ崖にてときをりは飛び降りたるものなるわが猫背

草刈十郎

海の日

・世

戦争の深き敵のウクライナあまたきざまれいつ果てるのか
救急車の音の切り裂く熱帯夜またも眠れぬ夜となるなり
敗戦国國のためなり戦死とふ名のもと石ころひとつ帰り来
海の日や海を汚しものはだれ海に謝ることばかりなり
真夏日の端居のわれは新聞紙一枚かけて寝寢してをり
酷暑日の森の一葉も揺れ見えずただ振々と蟬時雨降る
向日葵の夏だ夏だと咲きてをりわが老残もかくあらんかな

河野繁子 二年草

雁

みずならの黄葉舞いながら冬を告ぐ終の住処は低山のすそ
一を引き二をひき引き算ばかりなる心のひだに咲く山野草
のこん菊むらさき咲けりこれの世の温みをそと手渡すことく
焼きなすを美味しと食みし夏ばての人に夕べのこころ救わる
今夕の晴きよりし鷺二羽と哀しみわかち日暮れを歩く
空き家よりいで理の若からず急ぎもせずに道を横切る
二年草と鬼の笑うが種を蒔くえんやこらさと九十の坂

小林能子

赤堤暴雨

羊

寿退社の友が住まひて赤堤 ふたりの子を乗せ乳母車押す
地中海本社ご近所さんに友の住むマンションもありみな顔なじみ
あるときの香川先生日暮れまでじいつと隠れんばゆしまれしか
赤堤にもコロッケがありコーラがあり慕はしき香川夫人の笑顔
いろいろを思ひ出だせるその中に香川邸の火事鮮明なりと
子を亡くし夫を施設に友はいま見るべきものを見しことく云ふ
少し寂しきことばも聞きぬ耳に快きことばかり聞く耳にあらねば

近藤栄昭

夏の海

虹

口粗す波しぶき吐きまた泳ぐ沖の大岩日本海へ

クルクルと動く命を我が物にヤスの穂先の一つの命が

かかとから雲丹がでてきた三年目大波かぶるあの夏の岩

大物が潜む岩礁暗す波しづかに握る飽とり棒
藻のすき間拾つたサザエ抗わず弱き吸盤ゆがむ肉色

ふわふわと海底占める石もすく両手で搔き取る息続くまで

水中の獲物に腰が揺みいる首痛くなる浜はもうすぐ

近藤芳仙 坂の浦から

信

朝の浦朝の浦へと寄る潮と離りゆく潮ここは港町
潮待ちて風待ちてのち船出すと昔人は命掛けなり
コロナ禍の少しゆるぶに出できたるしまなみ海道波しづかなり
しろがねの橋につながる島いくつ 雨のゆふは人ぞ恋しき
船の案内もしてゐし村上水軍と知れば案内のあるを羨しづ
吾が乗る小舟のしぶき 沖はるか客船のこす白き航跡
瀬戸内はゆたかなりけむ大海と現在に遺れる城の大きさ

坂上直美

未亡人

天

夜長くひとりベッドに横たわる きれぎれの眠りきれぎれの夢
衣替え君の着ていしセーターを陽にあててみると 温もりかえれ
夕暮れはふと君帰ると思うとき風と気がつくまでのひととき
ふと見れば満月われを見ておりぬ彼方の君の気遣いなるか

君が乗る銀河鉄道いすかたを経巡るならん春の夜の空
男より先に死んではならぬのは女しさだめ今それを生く
わたくしが光になるのはいつだらうおだやかな春みそらに想う

坂出裕子

暑

洛

長月も末となれるに熱暑まだ衰ふるとも見えずこの夏
今までになかったといふこの暑さ長き歳月生きて来ていま
コロナ禍に閉ぢ込められてゐる日々の友の電話にこころ安らぐ
おはあちやんだつたら伏らす鉢の枝 立てて伸ばすと係が言ひしと
コロナ禍で会へない日々も子の近く孫の近くにあるか私は
炎熱の庭辺に搖るむらさきの桔梗に秋の涼をいただく
酷熱の熱暑の日々を越えたる花水木あかき実をかけり

佐藤道子 異常

・甲

須川千恵香 身めぐり

・眉

一斉にマスク外すは見物かと思ひしものを大方マスクス

「山桜今年は早いですね」と声をかけるマスクせぬ人マスクせぬ同士が会へる朝の道見知らぬ人の会話が弾む

三月に牡丹の花は散り果てぬ異常気候と言はぬ予報士

この夏は異常な暑さと思ふのにニューノーマルと言ふ人のゐて

高崎山から来ると鳴の猿の群浅間山麓いづくへの避暑

我が屋根に寝寝の子猿が歩みゆく子猿の手足意外に長し

篠原まり子

密やかに

・羊

鈴木結志

令月

・福

数枚の用紙にサインするものし造影検査の指示に従う
密やかに白き花粒残しはアライダルペール炎天に枯れ
鉢植えは部屋に並びてみずみずし萎えゆくさまは私ひとり
『ハンチバック』読みて異様に胸苦しカラー写真の作者つくづく
亡き友の歌読み返し夜が更ける深閑として今はもう秋
僅かな秋を感じた朝明けに起死回生のことばに縮る
寡黙的数字が並ぶ検診表安堵と不安ないませて一枚

柴田登志恵

北の緑

・天

関根榮子

空地

・埼

シンガーの足踏みミシンは宙からの光しつまる北向きの緑
雨あがり公園の池の錦鯉水路をゆつくり出奔途上
内海が大洋へ出づる水道に渡りの鳥は高度あげゆく
ほんのりとあかるき梅の咲くあたり目白のつかひ来すらしマスク来
すきとほる梅の林に春蟬の声ひるがりぬしゆわしゆわしゆ
山裾にうすくれなるの山百合のうつむき咲くが結界なりぬ
殻を抜けさみどりの翅広げしにまなこ見ひらき熊蝶凝る

友垣は一万五千首和歌の友宮中発信世界へ繋ぐ
拒み来し透析といふ二文字の選択肢なく決断は今
母偲ふ百歳記念の著茶碗長生きせよと移す掌
水源に沿ふ郷の畦茗荷路芹 三つ葉 自然の副菜
隠れ屋は倉の二階の小窓際ダンボール一つ秘蔵の宝
若き日のエプロン見つけ掛けてみる卒寿はよそにきりつと背筋
夢に酔ひ覚めて変はらぬ身のほどに片づけ手順を描くあかとき
静けさや令月にして明け氣淑しげラソーンを視覚に歩む

公園に会う人の帽子の鬼ヤンマ蚊よけのフィギュアとこの夏流行る
煙土を去年庭に入れしゆえかふいに茎立ち彼岸花咲く
いち早く秋の気配の彼岸花墓地に咲くゆえ昔は忌みし
毒つよき鱗茎を流水に晒しおき飴飴の昔は食せし記録も
時折の散歩コースに増えてゆく黒々と防草シートの張られ空地
どのような家のありしやたちまちに忘れ去られて空地というもの
D-Y好める夫も足弱くなりて人念に手摺を作る

関根和美 全地

・埼

処暑むかえたがわす尾花の穂を見るもああとよろこぶ母の声なき
ここよりあふれこぼる感情を池水の音は洗いてやます
して空仰がねば見ぬ雲の文字知れば啓示のごとくとらわる
古き世のひとののき想いみる真昼間まったくき間となること
正午より三時まで全地は暗しとぞ四福音書の三つに記す
神の目に正しからざることならむ祈り願うも叶わぬひとつ
たけたかきパイプオルガンおこそかに響きひろがりわれをつつみぬ

高尾恭子

古希の地団駄

・大

お道具をひっくり返して叱られた母を叱って吾は古稀なり
はんなりと花びら餅はいかがです母と一會の縁を生きて
牛乳を飲みつつ見ている時差こえて上書きされるビルの砲撃
日本語の上手になつたナターシャの遠く見つめる涙が青い
曼珠沙華はや咲きにけり忘れない九月が迫る
薔薇をたれる主のなき居間にワイングラスの曲線ひかる
氣の遠くなるほど長い明日のため古希の地団駄スクワット踏む

高津砂千子

兄

・風

亡き兄の忌明け法要家族のみになすとし聞けば言葉のあらず
はらからまとのめ役なる兄遡きて兄妹会の統くは難し
絵手紙のオクラの花のやわらかさしばしがめて暑さ忘るる
真夜覚めて作りし歌を忘れたり逃げし魚は追わずにおこう
亡き友の生家なりにき新聞の記事にぎりしめ尾道へ行く
ゆくりなく「あじさい」に会う亡き友が招きくれたる僕伴かこれ
合田草のカラカラと鳴るまぼろしの音きこえくる果たせぬ夢と

滝田靖子 気力

・新

賜ひたる賀状をしをりに正月をぼりぱつりと本読みである
うつむいて本ばかり読んでゐるわたしの身体には不健康な日常
「新しい戦前」タモリが笑まひつ放ちしひと言じわじわと不気味
線香の匂ひかすかに混じりて誰を弔ふ風吹き行けり
働く夢に目覚める憂鬱のいつまで続く職退きしのち
らふ梅も梅も桜も見に行かうわたしたちもう自由なんだから
ぼろぼろの身体やうやく癒えてきて氣力とふもの戻りくる少し

竹下妙子

一人二役

・霧

「ただ今」と言へば「お帰り」と言ふ吾の一人二役慣れて二十年
艶める椿一樹の葉裏にも光とどかぬ明るさはある
「ぞくつ」と紙に切られし指の傷小さく丸き朱の色を生む
ふり向けば空席のみが増えてゆくりハビリ帰りのわれは乗客
太陽の光を通すうろこ雲もみち燃え立つ里あたたかし
暮れてゆく陽の静かなくれなゐを亡夫とも思ひわれとも思ふ
幾年を生きつきて来し杉の命春雨浴びて在哉なりき

田土成彦

河畔にて

・宙

川の音聴くとしもなく行くものはかくのこときか人も時間も
いにしへの朱の緒舟まぼろしに翳る水面に水脈は残さず
川霧のなか凌潔船近づきてまた遠ざかる音のみ聞こえ
吃水を深く沈めて砂を積むボンボン船の音だからに
捨て小舟沙に埋もる歲月をうかうかと来しわかれかとも思ふ
毛馬村は無村の生地上流の赤川村はわれの産土
わが才は短歌に向ひてゐたのかと問へど答への出るはずもない

田 土 才 恵
孫と居て

・宙

永 田 進 一

・醒ヶ井

・山

雨雲の上行く飛行機物語めく音残し朝はじまる

備前焼きにどかりと春の花活けてやがて来るべき心の支度

繋がれる縁の不思議春来れば孫と三人の暮らし始まる

わが背丈はるかに超えし孫といてどこか逆転の思いしんしん

部活動楽しむ青春ありありと弾けるよう朝を出で行く

懐かしく思い出されたわが名かな秋桜咲いたと電話がかかる

ネイティブな幼子の声聞こえ来る異人館近き北野坂の道

玉 井 紛 子
砂 中 羊

・羊

葬儀あけ登校する子は禊越しの「いってらっしゃい」を一瞬待てり

大きな子小さな子がいて中学の入学式のリアル多様性

中学生になりて「別に」の返事増す子の脱ぎシヤツの裏側を見る

夏至過ぎて変色しゆく紫陽花や再雇用されし人の苛立つ

一番に落ちく粒に引っ張られ意思なき砂が時間を造る

五年後に定年となる 見回せば落ちゆく砂中に皆もがきおり

砂時計横に倒して逆さまにすることが明日のセカンドキャリア

中 島 央 子
衿 卷

・森

煮端といふ日本語のあたたかさ夕べの椀に里芋ほつこり

亡き姑の鉤針編みの衿巻に冷えやすきわが肩の辺ぬくむ

定めなき世に生まれたる曾孫の男の子は四千四百グラム

会食を約せしままに三年すぎ互に老いの回路がつまる

花となる力をためて紫陽花の日に日にふくらむ芽吹きのみどり

わが家の一日となりし保護犬は走るよ走る章駄天ばかり

風邪ひくな転ぶな義理を欠け聴く耳日々に重くなりたり

永 塚 節 子
木守 柿

・銀

そばの花はや実を結び収穫の時を待ちおり 秋の日穂し

かや葺の民家の並ぶ峪の村色深みたる木守柿ふたつ

友の墓にあるるほどの香の花手向けて帰る明日大晦日

おだやかな卯の年願い振る土鉢福は来ずとも難を軽ぜよ

植え込みに入りては戻るを繰り返すせきれいの子としばし遊べり

一人の狂氣のゆえに死にゆきし幾万の人残されし人

残されし命の長さに思い寄せうつせみそっとのひらに受く

仲 西 正 子
芭蕉記念館

・沖

芭蕉館の芭蕉灾れりよき風に包まれ立てり畠田川風

風流を訪ねたすねし芭翁の肖像画なべてふくらかな耳

錦木の朽ちたる肌にほよほよと木耳ひらく芭蕉館裏

よき人と出会いしことも旅土産ひとつ手に受く多羅葉の葉を

芭蕉にもあれば楽しや多羅葉に句をしたためし旅のことづて

芭蕉の句を多羅葉の葉に書き付けて十年のちのわれに送りぬ

娘の住める町も見馴れて多摩川の土手の風ゆくひとり手ぶらで

中 村 博 子 原発反対

・ 漢

住職は同級生とう光明寺の墓地に眠れる菊間栄子さん 東京駅降り立つホームに待ちましぬきりりと柔和な渡辺一枝女史 白き部屋に青田恵子の布絵あまた掛けられ集う原発反対 ただ一度も喧嘩はせずに六十年共に暮らして隣疾い崖道 「また電話するから死んだらアカンよ」と久しき友との受話器を置きぬ 小鳥二羽きらきら搖るるカードには八十三歳祝う孫慈里 大学院最終生の孫娘大修士論文のキー叩くらん

西 堤 啓 子

綿 毛 純

・ 天

いずれ海に流れ揺られて消えてゆく私の哀しみなどというもの 勝つためには何でもします。システムは形を変えて殺め続ける 岸を洗いとどろく水のちからもて変換したいことのあれこれ 暗転にわけなどなくて説明を拒む芝居を生きしていくだけ しらすの眼いっぱいどんぶりは旅の心を潮に誘う たくさん手がすくいとる哀しみは綿毛になって風に吹かれて 上書きの記憶に住まうわたくしの私でないふるまいを聞く

白 子 れ い

朝の鶯

・ 洛

細く伸びし桜の小枝に雪積みて雪の花咲く疏水のほとり 昨夜の雨にさわれたるか一齊に桜ひらけりルンルン歩む 朝の五時いであう人の少なくマスクはずして大きく息吸う ホーケキヨと朝の鶯われの歩み励ましくるるふた声三声 歩幅小さく物忘れ多くなりて来し吾にもひらけ返り花 ああ 鮫だからと己に甘くなりきたる心に鞭うち仰ぐ青空 鰯もる日々自と対峙なすに悔い多し彼の日この時かえり来らず

ば ば り ょ う こ 追 憶

・ 鹿

あら こたびも 笹で飛んできたのね とかって朝井さんに魔女扱いされたけ 僕の弟子に言うことをきかぬが二人 そのひとり ばかりようだと 深れ聞きこと 助えは邑子あさん折つけ 抗む私にお小遣い、親に逆らうではないと叱咤されつ 「足立さんはレンブラント似てますね」「あ それはうれしい」絵ハガキでの恋網 大会でのバスの中でさり気なくされど熱きお誘い A・M女史の 追憶はかぎりも無かれ鮮やかに遺されし記憶 まなうらの残像 地中海に耀いながら日はのぼり没りつつ尚も永久なる海面

浜 谷 久 子

耕す人

・ 地

ささやかな予定の幾つかこなす日日夕暮れはただ汐引くように 持続なき時間はいつか消えていて変わらぬ畠野の風景広がる やわらかな眼差しなして夕暮れが訪れてくるふたりの家に 婦、嫁に呼ばれて幾歳「お母さん」響きはいつも新感覚に 生命の神秘の無言土の中芽を吹くまでを黙す種たち どこにいても帰ってくる場所土の畠耕す人の姿が見える 今日ひとつあるかなきかの薄色に過ぎて静かに暮れようとする

檜 垣 美 保 子

予 感

・ 鳴

午前二時灯のともる窓みつけたり空との交信待つことひとつ シングルのベッドに兄とおとうとのまるるく眠る春 薔薇よりも 雨がふり一日晴れてまた雨の庭のみどりにあまがえる跳ぶ 日曜の火起こし体験 少年は火を吹き夏を挑発している 終点の一つ手前の電停は人っ子一人居ぬ雨あがり 雪つもる予感は恋のあかるさとしづけさと頬に知るつめたさと 一面の雪の静寂夜明け前テールランプの赤き点滅

福田庸子 蘭にて

・今

船田清子 虫の音

・天

行き交へる蜻蛉の影を追ひゆくを夏の名残りの空が見ゆる日
地蔵堂観音堂と並びたつ山の麓はぬくもりの道
裸木の果ての満月照らす界は戦さにすがるを厭かぬ国をも
物質なき時代到来遠からじ新年の朝世界に見入る
「雛祭の宵」歌ひくれたるほほゑみの人をしのばむ一人の夜は
川筋をたどる修驗の道跡を進むはたてに黒髪山立つ
新しき芽生の息の充ちゆくを湿りもちたる春の林は

藤田美智子

十二支一巡

・新

「夢を追ふ若者だつた」と見出しつく夢もてぬ君は彈かれてゆく
(こんな日もあるよ) こんもり雪のせてぶら下がりを木守の柿は
原発事故の責任誰も取らぬまま十一支一巡 兔が跳ねる
(処理水は安全)といふテレビCMに海風びたりと止みて立春
傷みたる白木蓮の花びら一枚づつを土は受けとむ
灰色の雲もと低く垂れ込めよ泣くまいと心に決めし日暮れを
ひたひたと時は進みぬ音の鳴る時計はどうにわが家にはなく

藤田巳行

ふる里の盆

・銀

本元由美子

ミトコンドリアのいたづら

・岡

息切れはミトコンドリアのいたづらか虚しきつれづれ胸を留へり
羊雲ものかなしげにふはふはと淡くなりゆくころのゆくへ
もみ敷く町石道を黙りしゆく同行二人のめぐみ賜ひて
残照の枯れ尾花の穂を撫づるとき寂しくひと日暮れ急ぐなり
永年の胸の痛みの不安あり胸に入りたるステント三センチ
ヒリヒリと痛みを伴ひよみがへる投げかけた言葉は「死んだつていい」
ウクライナのテレビに映る惨劇を沈黙にしては為らず言葉を探せ

牧雄彦

稻田

・大

朝のパンコーヒーにするかレモンティ我が人生の小さな選択
ふる里の思ひ出話に時は過ぐ我は山里妻は島育ち
ふる里のお盆思ひ出す庭先に白樺燃やし先祖を迎へる
精靈を乗せる牛馬はナスとキュウリ箸で足付け盆棚飾る
ご先祖は我が家にキュウリの馬で来るお盆の三日滞在のため
送り盆先祖はナスの牛に乗りゆつくりゆつくり靈山帰る
猛暑耐へ花を咲かせる曼珠沙華今年は彼岸を少し過ぎたり

きりぎりすはた馬追ひにこぼろぎの奏づる宵々絶えて久しき
春雨は砂糖をこぼす音聞かせ桜の笛へささやきかくる

勝手なる人類あての忠告や猛暑に豪雨地球悩ます

あれほどまでに晝ひし不戦を忘れ去り日本までもが戦力増強

東京より帰り来たれる孫娘ママより手早き「流し」の立ち居
嬉しくも茶の間に居ながらシチリアへ、モンブランなる氷河へもまた
二十年前はブドウの一房も「お国のもの」と売らず ウィグル

松浦禎子 ふるさと

・羊

三浦好博 黄金桃

・銚

ふるさとの亡き人々に逢いにゆくお盆参りは三年越しに思い出を共に生きたる人々の皆消え去りてさみしふるさと

裕福なる時代に残りし歳の町父祖のおもかげ漂うふるさと幼き日のわが耳元へ風の声本家の歳に自裁せし祖父

観音参りに手を引かれたる私は祖母の愛もて育ちし童女

内歳へ蛇腹の屏踏みゆくにこの家のおがさんのはほえみ今も「月浴びて瀧狂ひたる」句を詠みし一草の碑におもいを捧ぐ

松永智子

一語

・嵐

かなしみて言ひことばにかなしみてかへることばのあらずにひどし糸杉の木末をはなれ空へ飛ぶ背き螢火声のなく見る庭の木に螢火放ちうから寄り語りしゆふべいまにあたらし生きて来しいのちおほかたひとりにていま間にきく雪のふる音ひとの声逝きし日のままあたらし「飛翔」の一語いまにふりむく一世かけひとのことば「飛翔」その一語に見られつゝ來しあかときのビルにいまだ音のなく雨のふる音けふは休日

松本多摩子

八十歳

・桜

初めての写真を入れて賀状出す八十歳のわれのファミリー
水雨降る天氣予報は底という信じて待つは春の温もり
亡夫知らぬ孫に弔辞を見せる夕上の語る教師生活
少し先に楽しみ作り娘を訪いぬ一人くらしの今日生きるコツ
半世紀住みし地域に共に老い面倒見るも見られるも老い
ローブウェイ登りし先の雲辺寺子供退路の真言ひびく
児童館雷雨に子らの大さわぎ上がれば虹にまた大さわぎ

小判草あまた増やせば戦ぎるささらさらああお金持ち
枇杷の枝掴み掴みて天辺の月に向きつつ夕顔の花
声高に無神論者と言ふこともなくなり今は神仏に触る
月一度メール交換の友なりき全身麻痺と告げ来て絶えぬ金色に輝きにつづ着天を掃きゐる背高泡立ち草は
友からの黄金桃の福を浴び犬猿雉子のお助け要らず
さなきだに少なくなりし待ち時間公園滑稽辞めさせ呉れず

三木まり

・嵐

真夜中にあたたかな涙あふれて淡くやさしい夢を見ていた
ちちははが共に暮らすこの胸の灯りは絶やさず灯しつづける
たましいは何處へ還りたいのだろう私は北へ、海へと遠る
桃源とはかくも遠い夢なのが真夜中、声にならぬ声上ぐ
全天に瞬く星よ落ちて来い今日いち日の痛みを放つ
パステルの色の空を覚えてる鬼籍の人の柔らかな声も
水たまりばかりを選んで歩く子の小さな歩幅 あしたの幸あれ

宮本靖彦

学童集団疎開(1)

・凌

心配と期待を胸に学童疎開九月二日発ちぬ七十九年前
兵庫県加西郡富田村正樂寺住所すら記憶に残る
本堂の広きに我等小六男子五十名寝泊まり満室となる
村人は調理洗濯掃除など我が子のごとく面倒見くれたり
別棟の妖しきトイレ五右衛門風呂秋風までに新築となる
秋更けて寺の山でのきのこ狩り夜食の菜に舌つづみ打つ
村の柿盗りし罰とし寺庭に全員正坐。一度だけあり

三 好 聖 三 悪 童

・伊

もとむらしげと

合歎の花

・そ

にぎりめし三個に葡萄一房を添えて今日の昼飯とする
その昔よく頂きし楊梅が血糊のように歩道を染める
山中に胡桃を落として皮をむく五指を黄色く染めてひたすら
もたれあう企業の淵に呻く声ありて暗啓秋のはじめに
悪童が枇杷を盗んで見つかって逃げる山野も本氣で逃げる
いまもまだ体験ばかりを垂れ流し当事者意識の薄きこの國
名月を一瞥しつつ思いおりそうだな、かっては祭事だったな

御代田澄江

若き者らに

・茨

ウクライナの戦火の悲惨長引けり写経為す間も胸痛みつ
眞昼間の蟲音空を領す戦闘機百里基地へ戦争準備は願ひ下げたし
西福寺と聞き耳鋭るテレビ映像香川師奥津城の桜と覚し染井吉野の原種
「残り少ない学園だから」お弁当やめ友と学食と孫歌の文句通りに
元旦に久々に来し長男一家若葉マークの孫の運転
雨のち黄砂高窓叩く風激し姪の嘗む姉の法要
助けられたる吾はも命永らへて昔背負はれし兄の葬儀に

茂木斌

明言寺

・埼

孫われに優しく母に歎しかりし祖母の負いたる障がいと寡婦
バスを見に幼き我を背に負いてゆきたる祖母は足を病みいき
梅雨空にふわり木槿の白き花逝きたる母の最期のことば
五つ六つ若けたる木槿の白き花母に言わざりし言葉を持てり
あと十年生きむとしつつ逝きし母われに残し時間は長し
母逝きて知りたる一つちははの婚姻の日より早く生まれし
合歎の花おぼろに咲けばちちははの面影うかぶ夜のじじまに

桃原佳子

秋

コロナ禍で旅行にも全く行かなくなりテレビに見てる沿線の旅
次世代の墓守り案すできる間は夫と二人で墓掃除する
万歩計頼りの我は家事こなし納得のゆくまで足を動かす
真夜目覚め厨の灯点すこおろぎの鳴く声に耳澄ます
ゆく雲は静かに早し道沿いの藤袴の花咲く九月尽
今朝もまた救急車の音響き来る居間にいて解る近隣のこと
夜があけて何事もなかったように人は行き交い今日の一日始まる

久我田鶴子

オブローモフ

・羊

あらはれしギンガムチェックは松実さんまつすぐな目にこちら見てゐた
礼状のついでのやうに妻の死を知らせてきたり及川さんは
空遠く風の鳴る昼こゑもなくかへり来しもの翼をたたむ
東京湾かけらのやうに見えながら停泊中の船のいくつか
ビルの間にひかつて見えるきれぎれをそれでも海と呼びてゆふぐれ
パンダ葵の花パンダ顔ほらほらとわれに一鉢もたせてひとは
紀伊の国すさみの里のホトトギス筒状の黄を下げる撓める
上毛の石打にある明言寺こぶ観音と呼ばれ久しき
こぶ観音こぶとはいかに瘤ならずすべての病を瘤とし癒やす
明言寺幾年ぶりか山門の成りしばかりに拝跪し滑る
お詣りの印しにスタンプ置きあればスタンプ帖にすかさずに押す
湖池屋のボテトップスのり塩が塩分補給にこの夏うれし
サコッシュといへばおしゃれに聞こゆれとかベン・袋のこととはへこむ
「山岳はすべての風景のはじまりである」ラスキンのことばうなひて読む

船出

久我田鶴子

ちいさなる欲び」ともすべて告げん妻の孤閑のながかりし
なり

さがみなだすき墨りのただなかに怨れる島よ児のおらぶ
こえ

なれとへだつあいだの海へ墨る日を一つ映して船出せしな
り

『離離航海』

船出した日を振り返っている。船出した日の海面には、墨つ
た空が映っていた。晴れ晴れとした船出ではなかつたようだ。

それは、海が汝との間にあつて、「なれとへだつ」ものと意識
されていたからだろう。

「なれ」とは、妻。さらに言えば、まだ幼い二人の息子たち
であった。昭和三十二年、長男の聖^{こう}三は七歳、次男の銀^{しろがね}は
二歳だった。

伊豆に戻ってからの日に妻を詠んだ歌にこういう歌がある。
りにき

家出せるわが意地ずくの生きさまを嫁さきてついに嘆かさ

航海のあいだに立ち寄る妻子のもと。一緒にいなかつた時間
を取り戻すように妻に話をし、抑えきれない子どもの思いを受
け止めようとする。それは、愛おしくも、かけがえのない時間
だつただらうが、それでもまたそれを振り切るように船出して
ゆくのだった。

それしても、一首目のなんとも手荒な愛情表現。幼い男の
子が悲鳴をあげるのも無理はない（「陰」は「ほと」と読ませ
る？）。だが、その悲鳴も父親には嬉しかつたのだろう。「父に
は澄みてきこゆる」と詠んでいる。

吾妻欲りて夜夜くるしむもつきつめて思えは生をゆたかな
らしむ

寝に就かん夜間に底いなきことくそこにまほろしの児等こ
えはなつ

「家出せるわが意地ずくの生きさま」。妻子を残し、ギリシャ
船の船員となつて船出したことは、言つてしまえばそういうと
ころがあつたのだろう。

汝がはだか抱きざまに陰喰みしかば父には澄みできこゆる
悲鳴

遠くに置いてきた妻子を求めて苦しむ夜。それも「つきつめ
て思えは」、自らの「生をゆたかならしむ」ものであると考え
る男である。「意地ずくの生きさま」、あくまでも自分本位の生
き方。すいぶん勝手な言い分だと思わずにはいられない。だが、
本人にとっては、妻子を置いてでも出て行かずにはいられない、
やむにやまれないものがあったのだろう。

いのち

諸留 能興

歌を詠む 喜び・悲しみ

夜目覚む傍かたへの妻の寝顔には負はせし労苦の跡ありありといのちなりあゝいのちなり今更にいのちいとほし君が計報に

しぶき立て瓦を叩く雨音の心にしめる耳澄まし聴く

なにもかも我一人のためなりき今日一日のいのち頂く

ひとの世の悩みかなしみ知らぬげに今日もゆつたり雲流れ行く
わがこころ奥また奥の底知れぬ闇また闇をじつと見つむる

夏草の茂る恩師の家跡に新しきビル遠きかの日よ

開発の波に押されてけふもまた消ゆる茶畑宇治の山里

地蔵堂鉦鼓の紐を北風のかすかに揺らす コンコンコオン

玉の緒のいのち絶えにし君を焼く炉音がうがう がうがうがう

広沢の池いけ面を渡り来る風にまたも一枚散るわくら葉の

芝垣に差し残されし風車静かに回す秋の初風

窓ガラス伝ひ雨滴の奔り落つこころの奥にも雨水の降る

十数年前に、白子れい先生との出会いを通じ、「地中海」との縁も頂きました。苦勞ばかり負わせてきた妻と共に、短歌を作り御縁を頂けるようになったことを感謝しております。

故郷のこと、遠方に離れて暮らす息子のこと、親しき友の世を去りしこと、いのちのいとおしさも、生きることの安らぎも、喜びも、苦しみも、痛みも、「歌を詠み始めたことで、いのちを、より深く感じられるようになったのは、有難いよね…」と、妻と語り合っています。

十年ほど前、一命を失いかける不慮の事故に遭い、奇跡的に生き延びることができました。ベッドに縛り付けられ、身動きも出来ず、病室の窓ガラスを奔り流れ落ちる雨滴を眺めながら、己の生きざまの身勝手に涙している、自分のこころの奥底の、もう一人の自分に気付かせて頂けたのも、短歌を詠い続けてきたからなのでしょう。有り難いことです。

過去を悔やまず、未来に期待せず、今この一瞬、一瞬を、生かしてあることの有り難さを、いのちの尽きる瞬間まで、詠い続けたいと願っています。

今月の二人

春待つ丘

山口 桃子

鶴池の丘

この夏は日照りがきつく毎日の畠の水やり三十日も続くようやく生き残っている野菜たちオクラにゴーヤモロヘイヤ嬉しきりと草刈り終えた丘の上台風過ぎて茅萱が伸びる茅萱増え花壇の花の影もなし根っこ掘り出す残暑の朝に残暑の朝六十分を限界に茅萱の根っこと汗だくの服茅萱とり三日坊主になりそうできつい作業と眠し早起き友が来て畠の茅萱掘り起こす暑さにまけて熱中症に積み上げし茅萱の根っこ山盛りをゴミ袋に詰め十個にもなる茫茫の裏山業者に草刈りを頼めどひと月元のもくあみ仕事終え足早に家へ急ぎたりつるべ落としの夕暮れの道畠には窒素リン酸カリは要る灰も堆肥も欲張りな野菜手を抜けばちっともそだたぬ簡単な大根にすら翻弄される落のとう春待つ丘に膨らんで軽やかに籠いっぱいに摘む雨の朝小鳥の声に起こされて畠は出来ぬ体操しましょう

母の山口景子が亡くなつて今年で十三回忌。草花を愛し、短歌を生涯の糧に畠を耕し笑い声の絶えない家庭を築いた母でした。その鶴池の丘の畠、柿やみかんの果樹園を引き継いでそろそろ七十の声を聴き体力的にしんどい時です。手伝ってくれる姉達も段々と動けなくなつて、友達の手助けでようやく維持しているこの頃です。

短歌は田土先生ご夫妻の指導をいただき、日記のような歌ですが、読み返すと割と眞面目に毎日を過ごしている自分がそこになります。まだ勉強しなければと思う事だらけです。毎年出来る作物も変化して細やかな対応が必要で、一期一会を大切にしています。ゴルフも楽しい仲間がたくさんいるので、グランドシニアなどにも挑戦しています。農業もゴルフも体力がいるのでゆっくりと続けています。ところで、六十歳の手習いで始めたピアノ、最初は「冬のソナタ」がどれくらいで弾けるでしょうかと先生に尋ねると、三年ぐらいとの事でレッスンを始めましたが、やはり遅く始めたので八年かかりました。ゴルフもピアノも練習をさぼるとすぐ下手になります。これもぼちぼち続けていこうと思っています。

またも一枚散るわくら葉の

評者・久我田鶴子

諸留さんは、宇治市在住。歌を詠みはじめたことで、命をより深く感じられるようになったと言う。

夜目覚む傍への妻の寝顔には負はせし労苦の跡ありありと
夜中にふと目を覚まし、傍らの妻の寝顔を目にしたときの思
い。自分のために負わせてしまった労苦の跡が、その寝顔にも
ありありと見留められたのである。「ありありと」で終わって
いるが、そこには深い感謝の念が溢んでいる。

しぶき立て瓦を叩く雨音の心にしみる耳澄まし聽く

飛沫を立てるほどなのだから、雨の降り方はそれなりに激し
いのだろう。雨が瓦を叩く音を、ただただ聴いている作者だ。
「心にしみる」と四句目でいったん切り、「耳澄まし聽く」と結
句に据えたところ、決まっている。

開発の波に押されてけふもまた消ゆる茶烟宇治の山里

宇治と言えば、茶所。その宇治にして、開発の波によって茶
烟が消えていくという。「けふもまた」ということは、次々と
茶烟が消えていく状況は止むことがないようだ。

・地蔵堂鉦鼓の紐を北風のかすかに揺らす コンコンコオン
地蔵堂に下がっている鉦鼓の紐。北風がかすかに揺らすので、
鉦鼓は「コンコンコオン」と小さな音を立てているのだろう。

その音を聴き留める作者。ここでも耳を澄ましている。
・広沢の池面を通り来る風にまた一枚散るわくら葉の

「わくら葉」は、病葉。落葉の季節ではないのに、どこから
か一枚、また一枚と池に散ってくるのだろう。結句は、「散る
わくら葉の」と倒置のようで、漂うような浮遊感がある。

山口さんは、吹田市在住。母の最子さんと娘の桃子さん、二代にわたる「地中海」会員である。歌のみならず、母の大切にしていた鷺池の丘の畑や果樹園も引き継いでいる。

・この夏は日照りがきつて毎日の烟の水やり三十日も続く
夏の烟の水やり。雨が降れば休むことができるが、この夏は
三十日も休むことなく水やりを続ければならなかつた。
「三十日」という具体が、いかに大変な夏だったかを物語る。

・茅薺増え花壇の花の影もなし根っこ掘り出す残暑の朝に

茅薺は地下茎を伸ばして、その繁殖力たるや凄まじい。掘つ
ても掘つても、少しでも残つていればそこからまた地下茎を伸
ばしていく。残暑の朝は、そんな茅薺との闘いのようである。

・積み上げし茅薺の根っこ山盛りをゴミ袋に詰め十個にもなる
掘り出した茅薺の山をゴミ袋に詰めて、十個。ここでも数字
の具体が生きている。茅薺との闘いの成果が、満杯のゴミ袋十
個として目に見えるかたちで示される。

・烟には窒素リン酸カリは要る灰も堆肥も欲張りな野菜

烟には肥料が欠かせない。その主要素である「窒素リン酸カリ」。そのためには、灰も撒かなければならないし、堆肥も施さなければならぬ。野菜の欲するものを与える、というところにどうやら畑仕事はあるようだ。

・手を抜けばちつともそだたぬ簡単な大根にすら翻弄される

畑仕事の手抜きが野菜の成長に直結する、というのだから切
実だ。比較的簡単なはずの大根にすら翻弄されることは形無しであ
る。とは言つても、畑仕事が元気の素かもしれないですね。

元々詩が大好きで若い頃は詩を読みあつた。例えば立原道造の「のちのおもひに」の冒頭は

夢はいつもかへつて行つた

山の麓のさびしい村に

水引草に風が立ち

草ひばりのうたひやまない

しづまりかへつた午さがりの林道を…

高校生だった私には、育った塩崎村がこの詩の原風景に重なつた。

私は東京の下町で生まれたが、疎開先是信州の佐久だつたし、父が戦死したためその後母の実家の篠ノ井（塩崎村）で育つた。その後大阪で退職、田口紀久子さんのお誘いで「斑鳩グループ」に入り、亡くなるまで上田吟子先生の指導を受けた。先生には社会詠らしきものを作つてよく叱られた。

「社会詠は独自の視点をしつかり持たないと薄っぺらな新聞記事を写すだけの短歌になる」と。先生亡き後は「斑鳩グループ」を指導して下さる「天平グループ」の坂上直美さんに付いている。

私は信州に縁のある歌人に惹かれる。
・ゆずらざるわが狹量を吹きてゆく氷湖の
風は雪巻き上げて 武川忠一『冰湖』
・白きうさぎ雪の山より出でてきて殺され
たれば眼を開き居り

斎藤史『うたのゆくえ』

・信濃恋いまたしんしんと湧き出でて遠信

そしてこんなことがあった。

私は百人一首を暗記していない。疎開先での生活、母の里は農家で、触れる機会が無かった。勤めていた高校では、毎年新年になると一学年毎に体育館で「カルタ大会」をする。クラスの中に読み始めるときつと手の伸びる子がいて三十枚も四十枚も取る。

私はただ恥じ入るばかりだった。
だが、今年の春こんなことがあった。坂上さんが一昨年から歌会で「百人一首」を教えて下さっている。古典に出会うことなど無いと思っていたのだが、下手な桜の歌を数首作つた後、歌会で紀友則の「ひさかたの光のとけき春の日に静心なく花の散るらむ」を学んだ。「静心なく」という表現が「絶え間なくひらひらと舞い落ちる花びら」を表現する言葉として見事である。恐れ多くもこの大歌人に「私は負けた！」と思った。この短歌が私の身体の中に入ってきた、紀友則という人がそこに坐つていて、ようやく感じられた。つまり、この短歌に出会うという体験をした。

最後に、紹介したい歌を一首。視覚障害者の短歌サロンで出会つた盲聾者の温井敦子さんの作品です。

・久しふり四人そろつて筆談と手話をまじえて語る楽しさ

私と短歌との出会い 256

藤澤 元子

浜本 芙美歌集『夢の川』

光広
祥子

—短歌を生きる力に—

「夢の川」という歌集名に心ひかれつゝ味わう装帧。扉には高低差のある裸木一本が、僅かに重なつて描かれている。

浜本美美さんの第一歌集「夢の川」は、一九八六年（昭和六十一）上梓。香川進先生のあとがきより、作者のたっての願いがかなっての歌集であることがわかる。

昭和四十六年、藤代謙子先生と共に「地中海」へ入会。昭和四十一年、原因も病名も不明の癌入院中、直接の師となられる藤代先生と出会う。病室へ来て歌の話をして下さる

- 「わたしの処女集をいちばん喜んでくれるはずの弟が急死しました。この挽歌を！」——「病床の母が存命中に」というような願望は二、三十回におよんだであろうか。——すべての予定を変更し、夜を日につき、素稿の選歌と編集に専念した。一畠岐路に桜の花満るころ世に出て、故人の鎮魂の歌集になれば。——わたしは切望している。——地中海に発表したときの歌から一年代を追うかたちで編集——。つましき暮らしの弟在りし日に編集に使えと紙幣重ねぬ四百二十六首、四十二連の巻末の連「おとうと」十五首の挽歌の中の歌。姉にとっての短歌の持つ意味を知る弟君ならではの心情が、下句に具体的に表現され、作者の思いも想像させる。短歌との出会いを、作者のあとがきより抜粋する。

・臥す母の静かにみつむる枕辺の薔薇丹精に父が作れり
視覚、聴覚で捉えた情景描写に重ねられる心情。痛む心の感じられる歌の中に、ぼつとあかりの灯るような三首目、五首目の歌がある。読者としては、かなしくもほっとするようなこの

まっさらな心で先人観なく歌に言葉に、作者に向き合おうと読み始めた冒頭の「母と子」の一連は、作者と歌の背景とを一気にまっすぐに伝える歌で、「一首ずつ繰り返し読む」ようになる。
・病窓にみゆる街家の青すだれ緋えて帰らん暑さのこぬまえ
・入院のひととせながし潮の波きこゆる家にわが夫待てり
・秋雨に降りるバス停わが傘を持ちて姑は立ちませりけり
・母のからだ近頃病めると聞く帰途の「治る治る」とベダルを踏めり

歌い方が、多くの連に見られる。

・産めたかも知れぬと思う折ふしに頬ちくる胎児におもさしのなく

・性別のすでにありたる胎児さえ産めざりしわれに紫陽花の藍・輸血せしは杳ききさらき給いたる二千CCCを汚しつつ生く

自責の念は、家族詠にも読みとれる。

・唐突に差出す大き大の掌よ子あればやすけくかき抱かんに

杉のたらい産湯の時に使えよと持たしくれしよ産まさりしかな

自らの命の為に犠牲にしたと作者の言うわが子への思い、喪失感は、直接的、間接的に繰り返し歌われる。題にも含まれる

キーワードとしての「夢」の歌の多くにもそれを感じる。「夢」の語のある十三首の内、作者自らの「夢」は十二首。

①みずからの嗚咽に覚めし夜のじま自分だけが何時も生きて

いる夢

②夢ひとつ忘れて覚めしあかときの窓への木槿さびしき花や

③いたきほど奥歯かみしめいたりけり夢の怒りのさだかならぬに

④夢にしてかなしかりけり崖のわれ夫にあらざる人ただに呼び

⑤きみに似んまぼろしの子はほのぼのと夢の花野に花を搜せり

⑥夢のなかわが失明は告げられて逢いたきひとりを叫びつづけし

⑦夢にたちし裸形のありきさだかにはあらねどわれに忘れたがた

なし

⑧わが夢の川をはるばる来るものを言わんかたなし夢やぶれては

⑨みる夢のうするることき内海の鷗なれ鷗羽の山明らかに

⑩見る夢に色あらざりし彼岸花みてこしまなこ静かに閉する

⑪夢に遠い声のいでざるわがのみとあした鏡にみれば虫かむ

⑫宵の夢を吹雪くさくらか天をゆく雲さえ花の上にただよう

前半の歌には、辛くかなしい夢が続く。題名の読み込まれた⑧の歌、擬人的比喩的表現の上句に抱めそうで抱めない雰囲気があり、言い切りの四句と言いさしのように残る五句の倒置に、心の揺らぎを感じる。次第に外の世界に視線の向く後半の歌。夢と現の曖昧さ、浮遊感のある⑫の歌の景には、読者も引き込まれそうな気分になる。どの歌にも手がかりとなる景や対象がしっかりと歌われ、作者の背景を知らないても、一首一首が立っていると思う。

心ひかれる歌はここにあげきれないのが残念な程に沢山ある。

- ・あたらしきいのちを育む果ごしらえ冬空青きわが窓にみつ
- ・棘もてるかなしみあらん野薔のおりおり蝶と触れ合わんとき
- ・病む父のいのち終らんゆうぐれの終り彩どるものとし紫陽花
- ・わが死者の棲まんま青き湖の色ながらの盛店に売らるる

・いにしえゆ今に変らぬひとつとしわがうちにあれこの波のおと

「誰にも哀しみを訴えなかつたのは短歌があつたから」と作者。歌うことで故人は、作者の内に生き続けると信じたい挽歌。

- ・死者の声三とせは壁にあるという「はい」と張りある姑のみ声
- ・カンナ咲く葵月になりぬわが母も胎児も死なしぬ今まで父を
- ・ちちははのいます黄泉へ弟は煩の腫れ物もつたまま逝く
- ・まんじゅしやげ赤亦に咲け弟の終いの言葉と思うまで咲け

現実を受けとめ、自らの心を対象をまつすぐに見てまつすぐ

に歌い続ける作者は、「短歌は生きる力になる」ことを実感させ。故人と浜本美美さんの願いを受けとめ、香川進先生もまた強く願われたこの歌集に出会えたことが、ただただうれしい。告ぐるべきくさぐさを秘むるわが胸のスカーフの絹かぜに鳴るなり